

大学図書館問題研究会 京都

〒607 京都市山科区大宅山田町34
(Tel) 075-574-4118

京都橘女子大学図書館 小林倫道気付
(Fax) 075-574-4124

大学図書館問題研究会 ◆ 近畿5支部合同新春例会

「大学図書館の現状と未来像」

パネラー 竹村 心氏 (京都大学教育学部図書室)
湖城 強氏 (大阪市立大学図書館)
松原 修氏 (立命館大学メディアセンター)



湖城氏



竹村氏



松原氏

近畿5支部合同新春例会が1月27日(土)午後、京大会館で開催されました。昨年の例会は震災で流れたため、2年ぶりの開催となりました。

京都支部主催の今年の例会は、例年の講演中心の内容から一旦離れ、現場図書館員による報告・討論をメインに、より現実的な土俵での意見交流を意図して企画されました。パネラーにはお馴染み、竹村、湖城、松原の3氏をお招きし、それぞれの意識と立場で「大学図書館の現状と未来像」について語って頂きました。

湖城氏は「電子情報専門家(?)」の立場から従来のペーパー媒体とは全く様相を異にする電子情報における様々な問題点を概観される一方で、ネットワークによって地域格差が縮まるといったような新しい可能性も強調されました。松原氏は利用の視点から、限られた「書誌情報」に固執しがちなデータアクセスについての考え方の見直しや、それに伴って展開すべき「指導サービス」についてコメントされました。竹村氏は国立大学図書館政策の戦後50年を振り返り、「大学図書館に未来はあるのか?」と厳しく追究されました。いずれにしても、ドラスティックなメディアの変化によって情報社会は過渡的混沌状態にあり、図書館もその中で翻弄されている、という状況が浮彫りにされたようです。

さて、参加された皆さんの印象はいかがだったでしょうか?。本号では数名の方から感想文を頂き、例会の雰囲気をご紹介しますと思います。

【近畿5支部合同新春例会感想文①】

大学図書館の現状と未来像

合同新春例会パネルディスカッションを聞いて

前田 哲治

社会的な機構としての大学図書館のあるべき未来像を戦後の歴史を含めて竹村氏が、現代の情報技術と図書館がどう係わって行くべきかを考えた未来像を湖城氏と松原氏が話された。インターネットに傾斜した話し方をされた二人の中では湖城さんがより技術面に重点を置かれ、松原さんがより社会的な面を考慮された話をされたかと思われる。

昨今、インターネットやマルチメディアが大変な話題になっているが、流通している情報のどれくらいの割合を実際には占めているのだろうか。音楽の世界でCDがレコードを殆ど駆逐してしまったように、新しいメディアが図書や雑誌のようないままでの図書館資料に取って変わるのだろうか。松原氏も言っているように、このような印刷媒体の資料が消滅するとは思えない。実際、日本においても世界においても、逆に図書や雑誌の発行点数は年々増え続けているのではないかと思われる。

利用者の側からいっても、インターネットを利用して、外国の同僚と共同して仕事をしている人もいれば、図書に埋もれ、依然として昔風の仕事の仕方をしている人もいる。パソコンに夢中人や、研究室から全ての図書館の資料を検索できるようにしてくれという人がいる一方で、いまだにカード目録を維持してくれと主張する研究者が学内には混在しているのだ。

すると大学図書館は今まで以上に物としての図書資料の収集を行いながら、しかも今までは異質の資料を取り扱う必要に迫られていくのだろう。国立大学の内部ではそのようなものを取り扱う部署が図書館以外には無いのだから仕方がない。情報処理センターは大学内では後発の組織だから、人員的に図書館より小さくそのような仕事を引き受けるだけの余力はないと思われる。してみるとインターネットも電子図書館もそして伝統的な図書・雑誌も引き受け続けるのが図書館ということになる。図書・雑誌は切り捨てて、電子的資料だけになるということがはっきりしていれば、ある意味で話は簡単なのだが、昔からの資料を引きずりながら一方では最先端の技術的なことも処理せざるを得ないところに、今の図書館のしんどさがあるような気がする。

ここ数年の大学図書館をめぐる変化は激しすぎるようだ。3年前には、学内LANやインターネットの接続は自分の大学に回ってくるのは何十年先のことかと、半分は冷めた気持ちでみていたのが、バブル崩壊にともなう不況対策であれよ、あれよあれよとばかりに全国にネットワークが張り巡らされてしまった。

その一方で、文部省の大学図書館関係の予算が図書・雑誌を中心とした資料費からコンピュータ関係の費用に次第に重点を移してきてもう15年ほど経っており、大学図書館では資料費の不足が深刻化している。平成8年度予算案でも資料費が2億円近く減少し、電子図書館経費という何やら得体の知れないものにその金がつぎ込まれようとしている。これは、当然将来の図書館をにらんだ構想なのだろうが、その分図書館の現場は貧困状態に追いやられようとしている。悪名高い箱もの行政と同じで、夜間開館、休日開館、資源共有の美名をよそに、外側はきれいになっても、箱（図書館）の中身はだんだん貧相になっている。昨今の文献複写や相互貸借の増加をみよ。昔の蓄積で生きている貧乏人が相互

に必要な品を貸し借りしているようなものというのは、いいすぎか。(ふだんサービス掛から文献複写が増えた、増えたとこぼされているのでつい口が滑ってしまいました)。

電子図書館はこのような図書館の現場を救えるのであろうか。図書館員は竹村氏の言う国立入力工場の工員になってしまうのだろうか。著作権などの問題がクリアされたら、案外そうなるかもしれないと言う気はする。もちろん、図書館員がそうなると言うわけではなく、図書館で所蔵している資料を電子媒体に変換する作業を、図書館が担当するという意味である。そうすれば、研究室からでも居ながらにして必要な資料が見れる。結局は利用者の選択の幅を広げるとのことだと思ふ。図書・雑誌のそのものを見なければそれも可能であるし、電子媒体でかまわない人は、自分の家でも、研究室でもそれが見えるようにすればいいのだと思ふ。

図書館への要求の範囲はここ数年でかなり広がっていると言わねばなるまい。図書館はその限られた資源をその要求範囲のどこに重点配分していくか、問われているのだろう。技術的に可能でも所与の資源の中では実現不可能なことも多い。さて電子図書館はどうだろうか？。

お屠蘇に酔ったとりとめもない正月の話はもう終わりにしよう。私が図書館に勤めている間(まだ十数年はあるのだが)には、大学図書館の中で電子図書館的な部分は依然として一部分にとどまるのだろう。それだけに、大学図書館のすっきりした未来像を描くのは困難である。今まで以上にいろんな情報媒体が図書館内にあふれて、終始がつかなくなっているような気がする。まるでバベルの塔だ。だが、それも大学を含む社会と歴史の反映だから仕方がないのだろう。先は長い。あせらずに、今年もぼちぼち行こうか。

(まえだ・てつじ/神戸大学人文・社会科学系図書館)

【近畿5支部合同新春例会感想文②】

5支部合同例会に参加して

山本 貴子

合同例会に参加させていただきました。3人のパネラーのお話については、それぞれもう少しかがいたいと思うものばかりでしたが、詳細は他の方の報告におまかせするとして、私は、その中で心に留まったことを、2点ほど書くことにします。

まず、竹村さんの発表の中の「大学図書館の基盤を整備することが国立大学図書館の将来を未来につなげる」について。これをうかがっていて次の本の内容を思い出しました。「教育改革の報告書に目を通してみると、驚くべきことに、図書館に言及しているものはきわめて稀であることがわかる。われわれは情報社会に生きているにもかかわらず、図書館が質の高い教育に何らかの関係をもつとは誰も考えなかったのである。(中略)図書館は学問の卓越性を追求するうえで独自の役割を担っている。問題は、大学関係者の多くがそのことを認識していない点にある。彼らは大学図書館が積極的に教育的役割を担うような計画を策定するどころか、そのようなことは考えてさえもないのである」(p. iii-iv)。これはある本からの引用なのですが、どこからのものかお気づきでしょうか。コロンビア大学の学長と図書館長の共著『情報を知る力—大学と図書館の』からです。(まだお読みでない方、手軽に内容を知ろうと思われるなら、『大学図書館研究』Vol.47 (1995.8))

の岩猿敏生氏の書評をどうぞ。)この本が書かれたのは1989年、翻訳が出たのは1995年1月と、アメリカの現状を現していると言えそうです。われわれからすると、アメリカがある種の努力目標的存在になっている部分もあるのですが、当のアメリカでも問題はあります。ですが、岩猿氏も書いておられるように、「ここでアメリカが日本と違うのは、大学の教育研究の改革に大学図書館を必須のものとして位置づけようとして、多くの実践の上に立って、本書のような書物が書かれること」ですね。

もう一つ、気になったのは、松原さんの「出版社と提携してコンテンツ情報や帯情報、さらには原文情報の一部などをOPACで提供するであるとか、ネットワーク時代、マルチメディア時代に相応しい書誌記述にとらわれない目録規則なども考えられるのではないだろうか」というところです。もちろん、ここで言われているように「コンテンツ情報」などのようなものも必要だと思うのですが、また、実際、NDL関西館のプロジェクトの中には既にこのようなことも含まれているようですが、今のような時代だからこそ、目録規則を十二分に活用する(たとえば、従来からの目録に「任意規定」を加えてとるような)ことも求められているような気がします。これについては、目録のプロの方のご意見を待ちたいと思います。

最後に兵庫支部の支部長として、昨年の合同例会が流れてしまったことに対する申し訳なさと、一方で、このような会が何の問題もなく開催できるうらやましさを感じました。次に兵庫で開くときにはぜひご参加くださいますよう、お願い致します。

(やまもと・たかこ/羽衣学園短期大学非常勤講師)

【近畿5支部合同新春例会感想文③】

インターネットに大学図書館の未来はあるか!

大図研新春合同例会に参加して

島 文子

今年はインターネットが爆発的に普及するはず(?)の年だそうで、ちまたではインターネットが大はやり。老いも若きも、街中でも田舎でも、だれでもできるインターネットにメディアを挙げて大宣伝の昨今です。そんな中、私も遅ればせながら、インターネットの説明会に行ったり、各種の書物に接したりするようになり、そこに描かれる余りにもバラ色の(マユツバな?)未来に、そのまま大学図書館の未来を重ね合わせていいのか、?という疑問が、日増しに心の中に大きく膨らんできていました。そこにまさに折よく大図研の新春合同例会「大学図書館の現状と未来像」が開催されることを知り、「インターネットに大学図書館の未来はあるか!」という過激な問題意識でいっぱいになって、参加させていただきました。

当日、京大会館の会場はほぼいっぱい、このテーマへの関心の高さが伺えました。また3人のパネラーの方のお話のうち、インターネット関連のものが予想通り2本あり、やはり大学図書館にとって、インターネットは非常に大きな関心事になっているんだと実感されました。そのひとつの大阪市立大学の湖城さんのお話は、インターネットで何ができるようになるのかということについてでした。インターネットを利用するのはかなり簡単で料金も安く、機器も技術もどんどん進歩しているので、だれでも情報発信ができるよ

うになり、将来は水道や電気のように日常に欠かせないものになっていくのではないかと、そして、その社会への展開の速さからみると、今後は大学図書館でも無視できない存在になっていくだろうということだったように思います。もうひとつの立命館大学の松原さんのお話は、インターネットやマルチメディアを通して大学図書館がどのように変化していくかということについてのものでした。印刷媒体以外の情報があふれだそうとしている現在の社会状況の中で、これまで築かれてきた情報提供機関としての図書館の地位や方向性が揺らぎ始めているという現状を踏まえて、研究支援としての情報の加工・構築の重要性と教育支援のための情報リテラシーへの取組みの必要性が語られました。また、3人目の京都大学教育学部の竹村さんは、国立大学図書館の戦後50年の歴史を振り返りながら、大学改革の時代の中の図書館の現状と将来を話されました。「あなたは電子図書館に大学図書館の将来を託せますか」というお話の切り口は、私の問題意識ともピッタリ重なっていて、大変興味深いものでした。特に、図書館員自身が制度への提案や政策をもって、大学改革の中での図書館の位置を確立する足掛かりをつけていくことの重要性を説かれたことが、印象に残りました。こうしたパネラーの発言に続く、参加者の意見交換はあまり活発とは言えませんでした。討論の中で、パネラーの方々のインターネットや電子図書館に対する三者三様の考え方がさらに浮き彫りにされて、大学図書館の未来像の混沌とした様相をを象徴しているかのようにも思われました。

さて、以上のようにこの例会への参加はいろいろと実り多いものではありましたが、「インターネットに大学図書館の未来はあるか！」という私の疑問が、すっきり解決された訳ではありませんでした。インターネットのキーワードのように語られる「情報発信」についてだけでも、安価な分だけより商業的な利用に傾斜していくのではないかと（カタログ販売やコマース的な情報発信、厳格な利用登録によるデータベース検索など）とか、簡単な分だけどうでもいい情報の洪水がおこって利用価値はむしろ下がっていくのではないかと、というような不信感が今でもまったく消えません。さらにセキュリティや著作権やプライバシーの問題などを考え始めると、大学図書館にとってのインターネットの未来像はあまり明るくないようにも思えてきます。インターネットにアクセスできるかどうかということを利用して利用者の利益が左右されるような社会的格差を、図書館自らが生み出してしまう危険性や、インターネット至上の流行に目を奪われて図書館員が情報と利用者との間で何ができるのかわからなくなるなど、大学図書館の未来を考えさせられる大事な課題もたくさん見えてきました。これを機会に、大学図書館の未来像について、私なりに考えをまとめてみたいと考えさせられた有意義な例会参加でした。

(しま・ふみこ/京都工芸繊維大学図書館)

【近畿5支部合同新春例会感想文④】

夢の図書館はどんなところ？

秋山 千奈美

コンピュータが普及し、昨年の「Windows 95」の発売時のフィーバーぶりが示すようにネコもシャクシもコンピュータという昨今。大学図書館もその波が押し寄せて来ています。つい、数年前までは「電算化」という言葉が盛んに飛び交い、図書の受入が

ら利用者へのサービスまでをコンピュータに乗せ一つの流れにすることが最大の目標であった気がします。しかし、昨年頃から「インターネット」という言葉が町にあふれ、テレビや新聞紙上でも日常のこととしてニュースになっています。阪神大震災時の情報発信やホワイトハウスの猫の泣き声など、最近では東京築地市場のホームページ開設というふうに「インターネット」に情報を載せればニュースになるくらいです。大学図書館も、もつというど大学も世間の波に乗り遅れまいと「インターネット」にいかにか早く飛びつか、そのことを競っているように私には見えてしまいます。「インターネット」を使って何がしたいのか、何ができるのか、わかっている人はほんのわずかで私も含めほとんどの人がわかっていないと思います。

近畿5支部合同例会当日は3人のパネラーから「大学図書館の未来像」というテーマの報告がありました。「インターネット」が普及したことにより地域による情報格差がなくなったこと、一方で誰でもが自由に使えるので情報量が大変多くなり必要な情報を見極める力が必要になったこと、そして図書館においては利用者へのサービスの形が変わりつつあることなどが挙げられていました。私が興味を持ったのは、利用者サービスの形の変化です。というのも、利用者サービスは図書館の様々な仕事の中でも最も重要な仕事の一つだからです。そのサービスがコンピュータが普及したことによりどのように変わっていくのでしょうか。目録はカードからOPACへと、『雑誌記事索引』などは図書からCD-ROMへとどんどん電子情報へと変わってきています。図書館員は書誌の使い方を知っていると同時に電子媒体を使いこなせる力量が求められてきています。レファレンスカウンターではNACISIS-IRを使って所蔵調査を行い、NACISIS-ILLを使えば文献複写や館間貸出の申込ができます。手紙や電話で行っていた作業が、FAXになりそしてコンピュータ通信へと変わってきているのです。この変化についていけない人は、案外たくさんいると思います。周囲の人が全員「私は大丈夫、ついていってるわよ。」と見えるけど、私だって周囲の人からはそう見られてるんだと思えば心強いのです。(私は年令の割についていけない。))

学術情報センターに書誌情報・所在情報を登録するだけでは時代遅れ。最近では「インターネット」にOPACを載せることは一部の大学図書館が試みっていますが、そこに追いつけとばかりに次々と大学図書館のOPACが「インターネット」に登場しようとしています。「大学の地域への開放」が叫ばれている現在、図書館の蔵書の公開、つまり「インターネット」上にOPACを公開することは地域への開放の一つにはなるでしょう。しかしそのことで今までにないサービスの対象者ができるのではないのでしょうか。「インターネット」を使えば大学図書館を通さなくても文献複写や貸出の申込が出来たとしたら、接続している人すべてがサービス対象者に成り得るのです。大学図書館のレファレンスサービスはどのように変わっていくのでしょうか。

夢のなかで私はOPACや文献情報データベースを検索し、「アリアドネ」で全文テキストを呼び出すことを家から「インターネット」を使って行っていました。もしこれが正夢なら、図書館という建物は再び「保存書庫」へとなるのではないかと疑問に思った1日でした。
(あきやま・ちなみ/京都橋女子大学図書館)

ためて不仲になるよりも・・・

「いつもニコニコ前金払い」

会費納入のお願い

会費は前納することになっています（会計年度は7月～6月）。今年度最初のお願いで全体の6割の方に納入して頂き、12月のお願いでもう2割の方に納入して頂きましたが（2月7日現在）、あと2割の会員の方が未納のままです。会費は支部還元金を差し引いて本部へ納入することになっています。本部財政も逼迫しており、一刻も早く完納する必要があります。

次年度会費請求もかれこれやってきますし、2年分まとめて納入のお願いはご本人にも我々にも大変気が重いものです。お忙しいとは存じますが、会費納入につき取り急ぎお取り計らい頂きますようお願い致します。尚、移動・退職等による退会については最寄りの支部委員までご連絡をお願いします。

—（8頁より）—

がわからないのですから。読んでいる途中で、自分にとって意味不明な言葉用語辞典で調べようものなら、大混乱間違いなしです。例えば「マイクロソフトコンピュータ用語辞典第2版」で、「UNIX」をひいてみましょう。「1969年ミニコン向けに、AT&Tのベル研究所の Ken Thompson と Dennis Ritchie が最初に開発したマルチユーザー、マルチタスキングのオペレーティングシステム。UNIX には各種の形式と実装例がある。その中には、カリフォルニア大学バークレー校で開発されたバージョン（BSDリリースという）や・・・」。意味不明が2乗になってかえってくるばかりです。試行錯誤を繰り返しながら、キーボードをたたくときに緊張しなくてすむようになったのは、1年もたった頃でした。

電子図書館へとシフトしている今、学ばなければならないことは次から次へと増えていくばかりです。かといって、「コンピュータができればえらい」という風潮には、ちょっと反発したくもなります。先輩方が築きあげられたものを大切にしながら、あくまでも手段・道具として計算機を使いこなせればいいなと思います。

やりたいことはいっぱいです。2年前に、憧れのBLDSCを訪れたのですが、その時受けた刺激は、現在進行形です。また他国の図書館を見学してみたいし、図書室のホームページの充実、広い意味での情報検索の勉強、20年以上続けてきたチェンバロ、最近はじめた陶芸のまねごと等など、一日30時間欲しいくらいです。

今回は、附属図書館の廣部繁子さんです。私の前任者、電気系図書室のすばらしいシステムをプログラミングされた方で、密かに尊敬申し上げております。では、廣部さん、無理を申しますが、宜しくお願い致します。

「数珠つなぎ」のルール

- ①内容は硬軟自由。②原稿量も1ページ程度以上で自由。③執筆者には次回執筆者を指名する権利があります。④指名された人はもちろん拒否権なし。



| 衝撃の新コーナー!!

● 大図研京都数珠つなぎ 第1回

京都大学工学部
電気系図書室

どんかいさおり
呑海沙織 さん

4階まで階段をかけあがる、それが私の仕事のはじまりです。そうです。電気系図書室は電気総合館の4階にあるのですが、エレベーターがないのです。健康にいい職場です。

京都大学工学部には、(厳密には正確な表現ではありませんが)学科毎に12の図書室があり、異なる利用規程で、異なる分類記号で、異なるシステムで運用されています。私はその内の電気系図書室に勤務しています。正直なところ、2年前に配属されるまでは教室図書室の存在を良く把握できていませんでした。なにしろ、京大職員録には「教室図書室」の欄はないのですから(図書館員の名前は事務のところに列記されています)。ちいさいちいさい図書室だろうと甘い考えをもったのがはじめの間違いでした。

備品図書の数こそ約45,000冊、雑誌タイトル数500の確かに小さな図書室なのですが、とても活発な図書室だったのです。どちらかという学習図書室という色彩の濃い図書室ですが、それだけに授業と図書室が運動しており、とても良い関係にあります。年間貸出冊数が13,000冊強ですから、一概にはいえませんが結構いい回転率です。これだけ読まれば本望だろうという位ボロボロになっている図書がたくさんあります。利用者との距離も近く、アットホームな雰囲気大好きです。昨年の大地震のときも、たくさんの図書が落下し、書架が外れかけたりしていたので、「2、3日は閉室もやむを得ない」という状態だったのですが、先生方や学生さんが手伝いに来て下さって半日で作業が終了した、というようなこともありました。

反面、係員が3名で、受入・会計業務、整理業務をこなしながら貸出業務を行うので、勤務時間内にはじっくりと頭を使う仕事はできないという悩みがあります。ややこしいレファレンスが入ればなおさらです。いつも走りまわっているような気がします。利用者の対応の直後、自分がそれまで何をしていたのかどころか、どこに座っていたのかわからなくなることが、こわいことに日常茶飯事です。

それに加えてもつとこわいことに、計算機がさわれないことには仕事にならない図書室だったのです。受入から支払い業務、目録業務は当然のこと、事務連絡も e-mail で行われています。「一太郎」すら使ったことのない私には、「テフ」「ドス」「ウェブ」など呪文のような言葉が飛び交う中で、恐怖の日々を過ごしました。そのうえ、「廣部さん(後述)のときと同じサービスを続けてもらえるか新しい人の顔を見に来たんや。」などと図書室をのぞきに來られる教官もいらっしやって、プレッシャーに拍車をかけます。

けれど、おびえてばかりはいられません。幸い電気系図書室ですからその筋の本だけはたくさんあります。「入門」と名のつく本を片っ端から読んでいきました。はじめは、訳がわからなくても何でもいいからとにかく最後まで「活字を目で追う」という読み方をしました。何しろ悲しいことに、「何がわからないか」(☞7頁へ続く)

近畿5支部合同新春例会特集(132号)

感想文 (前田哲治、山本貴子、島文子、秋山千奈美)	2頁
会費納入のお願い	7頁
大図研京都数珠つなぎ(第1回)	8頁